

青年期における親子間葛藤 質問紙調査結果から 見える実態

著者	須崎 暁世
雑誌名	研究紀要
号	24
ページ	71-84
発行年	2023-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00001040/

青年期における親子間葛藤

—質問紙調査結果から見える実態—

Conflicts between Parents and Adolescents: The Situation as Revealed by Survey Results

須崎 暁世*
Akiyo SUZAKI

Abstract

Many studies have been conducted on the relationship between parents and adolescents. They generally used the term "teenage rebellion," which describes the conflict between parents and adolescents. However, some studies report a change in such conflicts. This study examined the behaviors and feelings from free-response statements, obtained from college students, to understand the actual situation of conflicts between parents and adolescents. A total of 38 people participated in the survey, and 26 of them (68.4% of the total) indicated past instances when they felt strongly rebellious. The analysis was conducted by dividing the participants into those with and without rebellious incidents. A limitation of this study is the small number of survey participants. However, results on the emotional and frequency of rebellion, both emotional and behavioral, showed that few adolescents rebelled on a daily basis, with many mildly specific rebellious behaviors.

This suggests that, overall, as shown in previous studies, few adolescents experience severe rebellion or conflict and that breakdowns in the relationship between adolescents and their parents, even if only temporarily, are rare. However, certain responses did not receive much attention in traditional adolescent psychology, such as rebelling against forcefully obeying parents' instructions, or not rebelling against parents, as they deem this action to be meaningless.

キーワード：青年期, 親子関係, 葛藤

I 問題

青年期の親子関係に関しては、国内外を問わず、多くの研究が行われてきた。Blos(1962)¹⁾の第二の分離个体化、Hollinngworth(1928)²⁾の心理的離乳などの理論に基づく研究は日本でも行われた。落合(1993)³⁾は心理的離乳の考え方にに基づき、親子関係を親から見た親子間の距離の大きさによって4つに分けた。落合(1993)³⁾は良い親子関係は子どもの発達とともに変化すると述べ、よい親子関係が続くとすれば、子どもの発達に伴って、親も変化し、親子関係が変化していく必要があると述べている。

一般的に親子関係の変化がもっとも目に見えやすい形で現れるのは、子どもが、青年期前期(思春期)を迎える頃だろう。概ね小学校高学年から中学生の間になると子どもは第二性徴が発現し、徐々に身体的に成熟を始める。この子どもの成長は身体的なものにとどまらない。松井(1996)⁴⁾は特に、中学生になると、知的な関心も広がり、ものごとを論理的に考える力がつき、社会の裏面や問題点にも目

*関西国際大学現代社会学部

が向き、親や教師に対してもその権威をうのみにせず、批判すべき対象としてとらえる力がついてくると述べている。その様な成長に伴い、子どもは親に対して反抗を始める。いわゆる「第二反抗期」として広く知られた現象である。

石川 (2013) ⁵⁾は第二反抗期を「思春期段階のもので、親に対して反抗的な態度をとる時期」と定義しており、思春期では親からの自立のために、親に対して反抗的な思いを抱き、態度や行動として現れると述べている。第二反抗期の現象が日本で特に注目を浴びるようになったのは戦後ともいえる。もともと、青年期は家族から独立し、自主的な生活を始めようとする時期で、自我意識に目覚め始めた青年は、批判的態度や反抗的態度を強める。そのうえ、戦前に生まれ育った親と戦後に育った青年との価値観の対立も大きく、両者の間に多くの緊張と葛藤が発生し、青年の反抗が強まったといえる(大西, 1955) ⁶⁾。それ以降、日本では、青年期、特に中学生や高校生が親に反抗的な態度を取る第二反抗期は広く知られ、それが存在することが自明の事のように考えられてきた。

しかし、心理学においては必ずしも現在、そのような見方ばかりではない。深谷 (2005) ⁷⁾はここ10年以上前から、第二反抗期が薄れてきており、しかもいわゆる普通の円満な家庭環境の中で、第二反抗期を持たない青年が増えてきていると指摘している。白井 (1996) ⁸⁾や福田 (2016) ⁹⁾などの先行研究においても3~4割の青年が第二反抗期を経験していないという結果が報告されている。また、反抗が存在したとしても、それはイメージされるような激しい反抗とは限らない。小高(2008)¹⁰⁾は親と青年の葛藤についての研究を概観すると、親と青年の間において、葛藤は存在するものの、比較的頻度が少なく穏やかだという報告が多いことを指摘し、自身の研究結果からも、現代の親と青年関係は古典的な混乱に満ちた嵐のような関係ではないことがうかがえると述べている。須崎 (2011) ¹¹⁾においてもインタビュー調査の中で、青年自身が自分の実際の第二反抗期の反抗と、イメージする第二反抗期の間ギャップがあることを報告している。

このような状況の中で、「第二反抗期」は、青年期において古くて新しい問題ともいえる。2013年の日本発達心理学会第24回大会における自主シンポジウム「思春期の親子関係—第2反抗期再考—」においても、「第二反抗期」の反抗が生じてくるメカニズムが一般に理解されているほど単純ではなく、様々な観点からの理解が必要であるという問題提起がなされた。齊藤・青木 (2021) ¹²⁾は、親子関係が友達のような対等な関係性であるとする“友達親子”という言葉で表現されるなど、親子関係の在り方が時代によって変化してきていることが想定される。加えてひとり親家庭の増加など、家族の在り方自体も変化してきていると言え、現代の青年が抱える親への葛藤や反抗、親との衝突の形は変化していることが推測されると述べている。こうした変化をとらえるためにも、現代の青年期の親子間葛藤(第二反抗期)の実態について調査する必要がある。また近年、齊藤・青木 (2021) ¹²⁾が指摘したように親との間に葛藤を感じ、反抗感情を感じつつも行動には移さない青年も存在する。その点でも反抗的な感情と実際の行動を分けたうえで、頻度なども含めて調査し、検討する必要がある。本研究では、自由記述を用いて、青年の親子間葛藤(第二反抗期)について、行動と感情それぞれについて調査を行い、実態の把握に努める。

II 目的

自由記述を用いて、青年の親子間葛藤(第二反抗期)について、行動と感情それぞれについて調査を行い、実態の把握を行う。

Ⅲ 方法

1. 調査協力者

近畿地方の私立大学に通う大学生 38 名(男性 26 名, 女性 12 名, その他 0 名)。平均年齢 21.34 歳(20 ~26 歳)。親と同居していると答えた学生は, 28 名, 同居していないと答えた学生は 10 名。

2. 調査内容

年齢, 性別, 親との同居の有無について尋ねたうえで, 青年期の親子間葛藤(第二反抗期)について自由記述と選択形式の項目を使用した。調査内容は以下のとおりである。なお, 須崎(2011)¹¹⁾においても, 「反抗」という言葉に戸惑いを覚える調査協力者が見られたため, あえて「第二反抗期」などの言葉を用いず, 「反発」「反抗的な気持ち」などに言い換えている。また, 質問紙は Microsoft Forms で作成したが, (4)で「親に対して, イライラしたり, 反発するなど, 反抗的な気持ちを強く感じた時期」がなかったと回答した調査協力者は(12)の質問に移るように設定した。

(1)あなたの性別を教えてください。

(2)あなたの年齢を教えてください。

(3)あなたの現在の生活環境について, あてはまる選択肢に○をつけてください。(親との同居の有無)

(4)あなたは今までの生活の中で, 親に対して, イライラしたり, 反発するなど, 反抗的な気持ちを強く感じた時期がありましたか。以下の質問ではあったと答えた方は, 質問 11 まで答えてください。質問の 12. と 13. は回答する必要はありません。

(5)今までの生活の中で, 親に対して, イライラしたり, 反発するなど, 反抗的な気持ちを強く感じた時期はいつごろですか。あてはまる選択肢をすべて選んでください。

(6)特にどちらの親にそうした気持ちを持ちましたか。あてはまる選択肢を選んでください。

(7)親にイライラしたり, 反発するなど, 反抗的な気持ちを持っていたころ, 親に対してどの程度の頻度でそういった気持ちを感じていましたか。当てはまる選択肢を選んでください。時期によって違いがある方は, 当てはまる選択肢のすべてを選んでください。

(8)親にイライラしたり, 反発するなど, 反抗的な気持ちを持っていたころ, 親に対してどう感じていましたか?どんな気持ちを抱いていましたか。

(9)親にイライラしたり, 反発するなど, 反抗的な気持ちを持っていたころ, その親にあなたはどのような態度を取りましたか。

(10)親にイライラしたり, 反発するなど, 反抗的な気持ちを持っていたころ, 親に対してどの程度の頻度でイライラや反発を態度に示していましたか。当てはまる選択肢を選んでください。時期によって違いがある方は, 当てはまる選択肢のすべてを選んでください。

(11)親のどんなところ(態度や行動など)にイライラしたり, 反発しましたか。

(12)今までの生活の中で, 親に対して, イライラしたり, 反発するなど, 反抗的な気持ちを強く感じた時期がなかったのはなぜだと思いますか。自分の考えをお書きください。

(13)中学生・高校生の頃, 親に対してどう感じていましたか。

3. 調査時期と手続き

授業時間に Microsoft Forms で作成した質問紙のリンクを配布し, 調査ページ上で回答を求めた。回答受付期間は, 2022 年 7 月 22 日~7 月 29 日。

4. 倫理的配慮

本研究は関西国際大学研究倫理委員会の審査を受けた。調査はすべて無記名で行われ, 回答への参

加は任意であること、無回答や中断による不利益が生じないこと、データは統計的に処理するため個人の特定がされないことを質問紙に記載し、併せて口頭で説明をした。

5. 分析

調査項目(4)～(7) (10)については、選択肢に基づいて分類する。調査項目(8)(9)(11)～(13)の自由記述については、調査協力者の記述に基づき、分析した。以下に、分析の詳細な手順を示す。

- ①項目ごとの記述を、1枚のカードに1つずつ記入した。
- ②カードを机上にランダムに並べ、記入してある語りを何度も読み、意味の近いと考えられるカードを収集してグループ化した(第1段階)。この時に、類似したまとまりが他にみられないと判断された語りについては、いずれかのグループに無理に当てはめることはせず、小数であっても1つのグループとした。
- ③収集したカード全体を見渡し、それらに共通するテーマをコード名とし、1つのグループに1つつけた。この作業を全ての記述に対して行い、コード名を構成した。

上記の手続きについて、筆者と心理学を専攻する学生2名、計3名で検討した。不一致な点があれば、再度検討を重ねながら作業を行った。なお、記述は端的なものが多かったが、具体的な記述の内容も見られたため、本文中に加え考察する。以下斜体になっているものは、自由記述に述べられていた文章である。

IV 結果と考察

調査項目(4)について、調査結果を概観してみる。反抗的な気持ちを強く感じた時期があったと答えたのは、38人中26人で全体の68.4%。かつて白井(1996)⁸⁾は、「今日の青年心理学の関心は、親子のコンフリクト(人間関係において生じる問題状況)を含む危機や葛藤を示す6割から7割の青年とそれを示さない3割から4割の青年の違いを説明するモデル構築にある」と述べた。本研究の調査協力者は、白井(1996)⁸⁾の述べた現代的な青年像と一致しているのではないかと考えられる。以下の質問では反抗期が存在したもの(1. 反抗期が存在した場合)としなかったと回答したもの(2. 反抗期が存在しなかった場合)を分けて分析する。

1. 反抗期が存在した場合

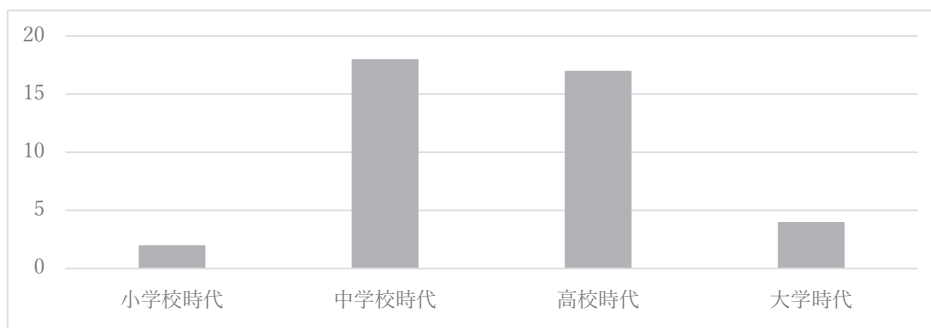
1.1. 反抗した時期

調査項目(5) 反抗的な気持ちを強く感じた時期がいつごろかという質問には①小学校、②中学校、③高校、④大学の4つの選択肢を用意し、複数回答可で答えてもらった。結果は中学校時代と答えたものは18名(69.2%)となり最も多く、次いで高校時代が17名(65.4%)であり、大学生になっても反抗的な気持ちを抱いていた調査協力者は少なく4名(15.4%)だった(表1, 図1)。これは宮下(1996)¹³⁾の青年が大学に入学する頃には、親に対する反抗感情は次第に減じ、自立した人間対人間の対等な関係が開始されるという指摘と一致する。また、須崎(2019)¹⁴⁾の結果とも数値的ほぼ同様である。この結果からは多くの学生がいわゆる思春期に反抗期が存在したことが読み取れる。

表1 両親に反抗的な気持ちを持った時期 (N=26 複数回答可)

反抗的な気持ちを持った時期	人数(%)
小学校時代	2(7.7%)
中学校時代	18(69.2%)
高校時代	17(65.4%)
大学時代	4(15.4%)

図1 両親に反抗的な気持ちを持った時期



1.2 反抗の対象

調査項目(6) 反抗の対象については、主な反抗対象として選ばれたのは母親が12名(46.2%)、父親が2名(7.7%)、両親ともが12名(46.2%)であった。二森・石津(2016)¹⁵⁾は第二反抗期の反抗対象に対して、対象が親、しかも多くは母親である状況が多く見受けられたことを指摘している。ただ、今回の調査結果では、反抗対象として父親のみを選択したものは少ないが、反抗対象として両親を挙げたものは46.2%と多く、父親に反抗していないとは言えない。二森・石津(2016)¹⁵⁾は、我が国は伝統的に、父親は外で働くもので、育児は母親がするものという文化が残っているため、一般家庭ではどうしても母親と子供の関係が強くなる傾向があるため、母親が反抗の対象になりやすいと考えられると指摘している。また、第二反抗期の反抗の背後には親に対する甘えが含まれているという指摘を踏まえるならば、父親よりも母親の方が子どもにとってより甘えやすい対象であるとも言える。もしくは、現代のように父親が仕事に忙しく、不在が多いということを踏まえるならば、母親のほうが、日常的に接触が多いため、半数近くが母親だけを反抗の対象に選択しているとも考えられる。

表2 反抗対象(N=26)

反抗対象	人数(%)
父親	2(7.7%)
母親	12(46.2%)
両親	12(46.2%)

1.3 反抗感情

反抗感情に関する調査項目(7)(8)についてみる。まず、調査項目(7)、反抗的な感情を抱いた頻度については、最も多い回答が1か月の間に何回かあった9名(34.6%)であり、次いで受験の時や試験期間など特定の期間のみ8名(30.8%)、1週間の間に何回かあった8名(30.8%)となっている。詳しくは、以下の表3に示す。今回の調査では、複数回答を可としたため、例えば中学の時と高校の時では反抗感情を抱く頻度に差があったことなども考えられる。中学生を対象として第二反抗期についての調査を行った福田(2017)¹⁶⁾は、母親に対して「いつも」「ときどき」「たまに」苛立つものは7割であるが「いつも」そのような状態になっているものは比較的少なく、現代の中学生の第二反抗期の特徴として、母親に対していら立ちもするが、それが常に続いているのではなく、そのような状況が時折生起

する程度であることを報告している。今回の調査結果でも、毎日反抗的な感情を抱いていたと回答した青年は3名(11.5%)と少数にとどまっている。また、受験の時や試験期間など特定の期間のみと回答した青年が一定数いたことにも注目したい。これは、反抗感情が単に親との関係のみで生じているのではなく、試験や受験などの外的要因の影響が大きいことを示しているのではないだろうか。加えて、学習など特定のテーマで親子間葛藤が生じているとも考えられる。

調査項目(8)、反抗的な気持ちを持っていたころの親への感情については自由記述による回答を求めた。詳細は表4に示す。最も多いのは「イラつく」「むかつく」などの「むかつく」が4名(15.4%)、次いで「鬱陶しい」「面倒くさい」「ほっといてほしい」「しつこい」「うるさい」が、各3名(11.5%)ずつとなっている。いずれも心理の臨床場面などで思春期の子供に親について尋ねた時によく登場するフレーズである。「ほっといてほしい」の中には、一人暮らしの願望が募ったことや、進路への口出しに対してほっといてほしかったという気持ちなども語られていた。親の考え方への否定・反発は2名(7.7%)で、「絶対にその考えは間違ってる的な感情」「矛盾してる、親は良くて私はダメなのはなぜという気持ち」という従来の青年心理学における第二反抗期と一致する内容ともいえる。加藤(1987)¹⁷⁾は、青年期の認知的発達や自我の発達に伴い、青年が、自分の目でものを見、判断するようになってくると、親や教師の言動は矛盾に満ちたもの感じられるし、社会的慣習の多くも非合理的なものに思えてくると報告している。この指摘を踏まえると、こうした親への反発は、青年期の発達に伴い、今まではそれほど気にならなかった点も含めて、そのような親の姿勢に否定的な感情を抱き反発したのではないかと考えられる。

表3 反抗的な気持ちを感じた頻度(N=26 複数回答可)

反抗感情の頻度	人数(%)
毎日	3(11.5%)
1週間の間に何回かあった	8(30.8%)
1週間の間に1回程度	2(7.7%)
1か月の間に何回かあった	9(34.6%)
1か月の間に1回程度	3(11.5%)
受験の時や試験期間など特定の期間のみ	8(30.8%)

図2 反抗的な気持ちを感じた頻度

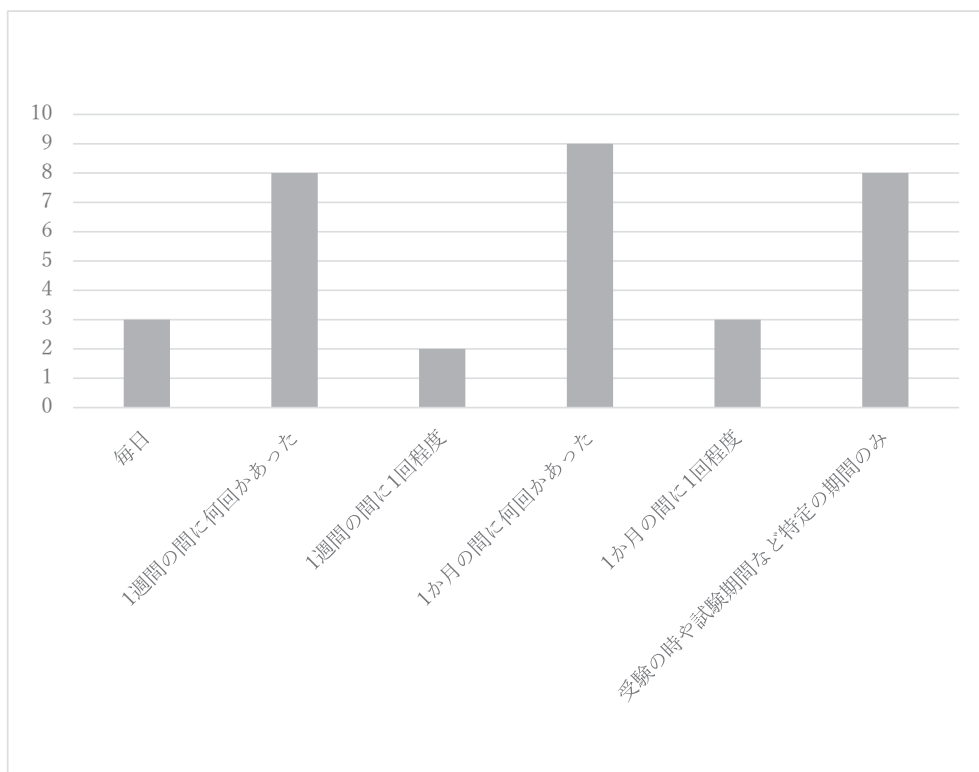


表4 反抗的な気持ちを持っていたころの親への感情(N=26 複数回答可)

親への感情	人数(%)
むかつく	4(15.4%)
鬱陶しい	3(11.5%)
面倒くさい	3(11.5%)
ほっといてほしい	3(11.5%)
しつこい	3(11.5%)
うるさい	3(11.5%)
嫌悪感	2(7.7%)
親の考え方への否定・反発	2(7.7%)
殺意	1(3.8%)
なぜ自分にストレスを与えるのか	1(3.8%)
親が自分を嫌っている	1(3.8%)
無回答	1(3.8%)

1.4 反抗行動

反抗行動に関する調査項目(9)(10)についてみる。まず、調査項目(10)、反抗的な気持ちを態度に示した頻度については、最も多い回答が受験の時や試験期間など特定の期間のみ8名(30.8%)、1週間の間に何回かあった7名(26.9%)、1か月の間に何回かあった6名(23.1%)となっている。詳しくは、以下の表5に示す。反抗感情の頻度と比較したときに、図2と図3を比較すると、大きな違いは見えず、ほぼ同じような結果となっている。ただ、態度に示さないと回答した協力者も存在し、今回は調査協力者が少数ではあるが、反抗感情を抱きつつも行動には示さない青年の存在もうかがえる。

調査項目(9)、反抗的な気持ちを持っていたころの親への態度については自由記述による回答を求めた。詳細は表6に示す。最も多いのは「キレル」「言い返す・反論」「態度は変えない」が各4名(15.4%)、次いで「嫌そうな態度」が3名(11.5%)、「そっけない態度」は2名(7.7%)だった。反抗的な気持ちを態度に示した頻度について、態度に示さないと答えた調査協力者は1名だったが、「なるべく普段と変わらないように態度をとっていた」などの青年側の努力も含めると一定数の青年が親に対して反発を感じつつも態度には示さないように努力しているようにも見える。齊藤・青木(2021)¹²⁾は、中学生を対象とした調査から、現代の中学生の特徴として、親との間に葛藤を抱えながらも、その葛藤を反抗行動や態度として表現することが難しい状態にあると考えられることを指摘している。その意味では今回の結果もそうした現代の若者の傾向を示しているとも考えられる。

反抗形態について、小沢(1998)¹³⁾は親への反抗形態を6つのカテゴリーに分類した。その中で、「親を無視するまたは親と話をしない」、「親を避けて部屋に閉じこもる」、「親に会いたくなくて外出するまたは家出をする」の3つのカテゴリーは親から離れる反抗に分類され、「親に口ごたえをする」、「親にイライラして物に当たる」、「親に対して暴力を振るう」のカテゴリーは親に向かう反抗に分類された。その意味では、今回の調査協力者は「キレル」「言い返す・反論」の割合が比較的高く、「親に向かう反抗」をとっていた青年が一定数存在すると考えられる。ただ、「基本的に口喧嘩をして次の日には直っていた」という記述もあり、親に対して向かう反抗としても、暴力や物を破壊するなどの記述がないため、程度は軽く短時間で終了していた様子もうかがえる。須崎(2009)¹⁴⁾が作成した反抗行動に関する尺度において、重度の反抗についての項目が、フロア効果により取り除かれたこととも一致している。青年にとって反抗したと感じていても、客観的に見れば、比較的軽い反抗のみの第二反抗期を過ごす青年が一定数存在することは無視できないだろう。

表5 反抗的な気持ちを態度に示した頻度(N=26 複数回答可)

反抗行動の頻度	人数(%)
毎日	3(11.5%)
1週間の間に何回かあった	7(26.9%)
1週間の間に1回程度	1(3.8%)
1か月の間に何回かあった	6(23.1%)
1か月の間に1回程度	4(15.4%)
受験の時や試験期間など特定の期間のみ	8(30.8%)
態度に示さなかった	1(3.8%)

図3 反抗的な気持ちを態度に示した頻度

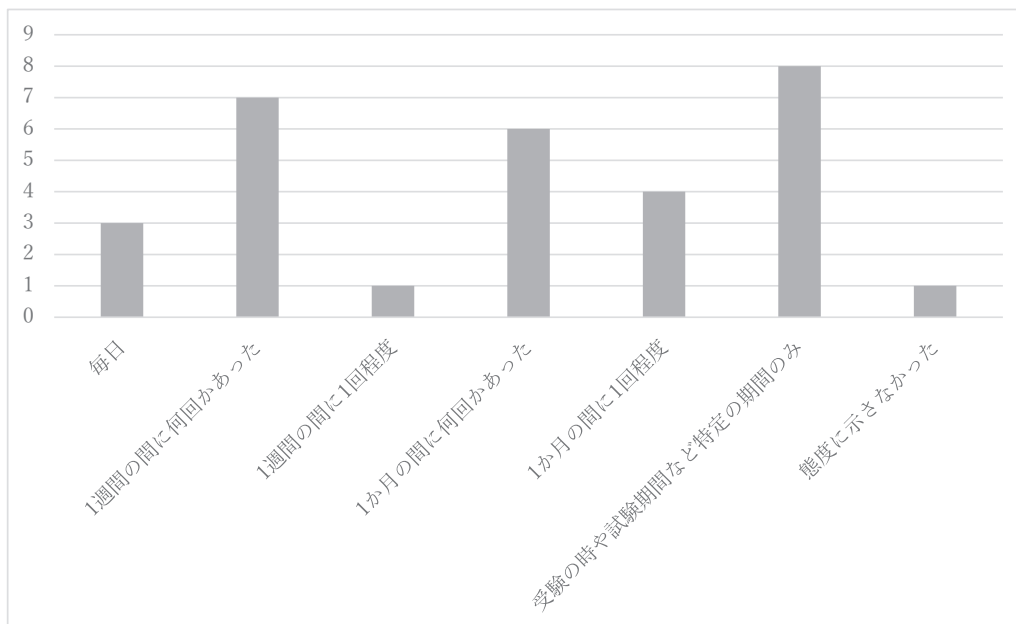


表6 反抗的な気持ちを持っていたころの親への態度(N=26 複数回答可)

親への態度	人数(%)
キレる	4(15.4%)
言い返す・反論	4(15.4%)
態度は変えない	4(15.4%)
嫌そうな態度	3(11.5%)
そっけない態度	2(7.7%)
無視	1(3.8%)
わからない	1(3.8%)
無回答・不明	7(26.9%)

1.5 反抗の理由

調査項目(11)親のどのような点に反抗的な気持ちをもったかについて見る。親のどのような点に反抗的な気持ちを持ったのかを記述してもらった結果、表7に示すように様々な回答が得られた。「過干渉」が最も多くなっている。この干渉については、「口うるさく言う」「いちいち自分の行動に心配してくる」などおそらく親の側としては良かれと思つての言動であつたとしても、青年の側が「干渉」と受け止めていた。また、「ゲームをやらせてくれない」「欲しいものがあつても頭ごなしにだめと言われる」というような「行動を制限してくる」が3名(11.5%)、「進路や勉強方法などに口出しをしてくる」などの「進路勉強に関する葛藤」3名(11.5%)と続く。中学生・高校生の反抗の具体的なきっかけや現れ方を調べた鈴木(1980)²⁰⁾の調査によれば、この、「何かと干渉する」「進路勉強に関する葛藤」

は中学生の場合「勉強しろ、勉強しろといわれるとき」(干渉・指示に対する反抗)、高校生の場合「干渉過剰」と一致するのではないかと考えられ、現在においても親子間の葛藤の原因が1980年代と変化していない部分も存在すると考えられる。

一方で、「親の愚痴の聞き役にされる」2名(7.7%)のような、従来あまり注目されてこなかった反抗の理由も見られた。須崎(2018)²¹⁾における青年に対するインタビュー調査では、特に母娘間においてお互いに愚痴を言い合うことは、両者の距離を縮め、娘にとって「母も一人の人間である」ことを意識させ、むしろ親子関係の再構築に肯定的に働いていた。しかし、まだその段階にない青年にとっては、親の愚痴をしかもおそらく一方的に聴かされることは負担であり、そうした点に青年側は反発するケースもあるとも考えられる。近年、「毒親」という言葉が一般に流布し、子供を自分の愚痴の聞き役やケア要員として使う親が問題視されるようになった。ある意味では親の愚痴の聞き役を子供に担わせることは、親のケアを子供に押し付けているようにも見える。こうした現代的な親子間葛藤の課題、むしろ親の側の要因についても、今後、臨床現場における事例研究以外でも注目する必要があるのではないだろうか。

表7 両親のどのような点に反抗的な気持ちを持ったか(複数回答可)

反抗の理由	人数(%)
過干渉	7(26.9%)
行動を制限してくる	3(11.5%)
進路勉強に関する葛藤	3(11.5%)
自分の思い通りにならない時	2(7.7%)
親の愚痴の聞き役にされる	2(7.7%)
親の態度	2(7.7%)
話が合わない	1(3.8%)
家事をしない	1(3.8%)
親の考え方	1(3.8%)
わからない	1(3.8%)
全部	1(3.8%)
無回答	2(7.7%)

2. 反抗期が存在しなかった場合

2.1 反抗しなかった理由

反抗的な気持ちを強く感じた時期がなかったと回答したのは12名おり、その場合は調査項目(12)で理由を記述してもらった。詳しくは表8に示す。須崎(2019)¹⁴⁾では、「自由にさせてくれる親だった」などの親側の対応を理由に挙げる青年が多かったが、今回の調査では、「反発して喧嘩になったら時間の無駄になるだけだと思ったから」「イライラしても、発展がないから」というような「反抗する意味がないと思った」という回答が3名(25%)と最も多く、次いで「自分の倫理的な価値観で親に当たる、人に当たることは良くない」というような「自分の性格」2名(16.7%)というように、自分の考え方や性格を理由に挙げる調査協力者が多かった。難波(2014)²²⁾によれば、現代の若者はすべてのことに

既視感を抱き、いちいち腹を立てない特徴があると指摘している。

その意味では、今回の調査結果においてもそうした青年側の「親と対立するのはよくない、または意味がない」という一種のあきらめや「悟り」のようなものがあるのかもしれない。「親に感謝していた」2名(16.7%)、「親が好きだから」1名(8.3%)のような、親への肯定的な感情により反抗しなかった場合もある。また、「父親とも母親とも会話や一緒に外出をすることが多かったため」のような「親との接触時間の長さ」2名(16.7%)は、中学高校生になると親との外出などを嫌がることなどもみられるため、接触時間が長いから親と仲が良かったのか、親と仲が良いから接触時間も長くなった(抵抗感がなかった)のかは不明である。ただ、齊藤・青木(2021)¹²⁾の中学生を対象とした調査でも、親に対して葛藤や反抗感情を抱くことに比べ、好意的感情を抱く生徒が多い傾向がみられた。そのため、親との接触時間が長いことに抵抗感がない青年が増加している可能性も考えられる。

表8 反抗しなかった理由(N=12 複数回答可)

反抗しなかった理由	人数(%)
反抗する意味がないと思った	3(25%)
親に感謝していた	2(16.7%)
自分の性格	2(16.7%)
親との接触時間の長さ	2(16.7%)
親が好きだから	1(8.3%)
母子家庭だった	1(8.3%)
不明・無回答	1(8.3%)

2.2 中学・高校生の頃の親への感情

反抗的な気持ちを強く感じた時期がなかったと回答した調査協力者に中学・高校生の頃の親への感情を調査項目(13)で記述してもらった。詳しくは表9に示す。「優しい人」「大事にされてると感じた」などの「好意的感情」が4名(33.3%)、次いで「感謝していた」などの「感謝」が3名(25%)と続く。また、「色々なことについて話し合える相手と感じていた」などの「相談相手」が2名(16.7%)となり、全体的に親に対する肯定的な感情が見受けられた。親が、「相談相手」として子供に頼りにされることは、須崎(2011)¹¹⁾でも見られている。NHK世論調査部(2004)²³⁾は1982～2002年にかけて4回行われた「中学生・高校生の生活と意識」調査に基づき、相談相手として、友人よりも母親を選ぶ回答が増えてきたことを指摘しているが、そうした相談相手としての親の存在が根付いているとも考えられる。白井(1997)²⁴⁾の大学生の親子コンフリクトの回想分析では「『良い子でいよう』として反抗できなかった。」という回答があったが本調査結果からそれは見られなかった。江上・田中(2013)²⁵⁾の研究からは、反抗期を経験しなかった背景として、家族機能が上手く作用しているために適切に自立が促進され、親離れのために反抗を必要としなかったために反抗期がなかった場合と、親の期待に応え続けるため、過度に自己抑制をしながら「よい子」でいなければならなかったために反抗心を抑制した場合があると推測される。調査協力者が少なかったことも原因としては考えられるが、親や教師に反抗せず、無理に「いい子」を演じることによって第二反抗期が平穏だったと考えられるものは、今回の調査協力者には少なかったのではないかと考えられる。

表 9 中学・高校生の頃の親への感情(N=12 複数回答可)

中学・高校生の頃の親への感情	人数(%)
好意的感情	4(33.3%)
感謝	3(25%)
相談相手	2(16.7%)
普通	2(16.7%)
不明・無回答	1(8.3%)

V おわりに

本研究においては、自由記述を用いて、青年の親子間葛藤（第二反抗期）について、行動と感情それぞれについて調査を行い、実態の把握を行った。調査協力者の人数が少ないという問題点があるが、全体的には先行研究同様、激しい反抗や葛藤を経験する青年は少なく、親を全面的に否定する、あるいは、一時的にであっても親との関係性が切れてしまうようなことはあまりなかったのではないかと考えられた。一方で親の愚痴を聞かされることへの反発や、親に対する反抗を意味がないと感じ行わないというような、従来の青年心理学ではあまり注目されることがなかった回答も見受けられた。

齊藤・青木(2021)¹²⁾は、親子関係が友達のような対等な関係性であるとする“友達親子”という言葉で表現されるなど、親子関係の在り方が時代とともに変化してきていること、加えてひとり親家庭の増加など、家族の在り方自体も変化してきていると言え、現代の青年が抱える親への葛藤や反抗、親との衝突の形は変化していることが推測されると述べている。また、第二反抗期をはじめとする青年期の親子間葛藤について考える際、親の側の要因も考慮する必要がある。「毒親」については、2008年に出版された信田さよ子による『母が重くてたまらない—墓守娘の嘆き—』以降、広がり、新聞紙面でも2013年以降取り上げ、一般に流布されるようになった。本研究でも、青年にとって親の愚痴を聞かされるのが負担になり、それにより反発が起きているというケースが存在した。こうした現代的な青年期の親子間葛藤について、より詳細にみていく必要があるのではないだろうか。

青野（1997）²⁰⁾は、一つの物差しでは計れない様々な青年層が出現している今日では、反抗期の意味を問い直す作業が必要であることを指摘している。現代社会は、かつての青年心理学では想定していなかったような、ひとり親家庭の増加、若年層の貧困、価値観の多様化などの状況が存在する。そのような現代社会において、従来の青年期の親子関係の考え方では親子関係についてとらえることができなくなる可能性が高い。従来のような、両親がそろい、経済的にも一定余裕がある家庭を念頭に置いて、反抗や葛藤について考えることは、青年の反抗や葛藤の意味そのものを見失うことにもなりかねない。すなわち、平均寿命が伸張し、社会が変化する中で、人生を通しての反抗や親との葛藤の意味が多様性を踏まえたうえで検討がなされることが、青年期の自立や「親離れ」を考えるうえで重要なのではないだろうか。

【引用文献】

- 1) Blois, P. On adolescence : A Psychoanalytic Interpretation. New York : Free Press, 1962
- 2) Hollingworth, L. S. The Psychology of the Adolescent New York:Appleton,1928
- 3) 落合良行「親離れとはどうすることか」 落合良行・伊藤裕子・齋藤誠一編著『青年の心理学 ベーシック現代心理学4』有斐閣, 139-151 頁, 1993
- 4) 松井豊「親離れから異性との親密な関係の成立まで」 齋藤誠一編著『人間関係の発達心理学4 青年期の間関係』培風館, 19-54 頁, 1996
- 5) 石川満佐育「女子学生における第二反抗期の経験と親子関係, アイデンティティの確立との関連の検討」『鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇』64 巻, 1-18 頁, 2013
- 6) 大西誠一郎「家族間の緊張」 牛島義友・桂広介・依田新編著『青年心理学講座3』金子書房, 79-135 頁, 1955
- 7) 深谷昌志「反抗期を持たない子どもたち」『月間生徒指導』 35 巻, 6-9 頁, 2005
- 8) 白井利明「若者のこころに迫る(II) 心理科学研究会 1996 年春季研究集会概要」『心理科学』18 巻 2 号, 61-63 頁, 1996
- 9) 福田香織「第二反抗期が生起しない要因の検討—第二反抗期の経験認識のない大学生の自由記述から—」『日本教育心理学第 58 回総会』660 頁, 2016
- 10) 小高恵「青年の親への態度についての発達の变化—心理的離乳過程のモデルの提案—」『太成学院大学紀要』10 巻, 31-48 頁, 2008
- 11) 須崎暁世「現代の青年における第二反抗期—反抗が親子関係に与えた影響を中心に—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科 2010 年度修士論文(未公刊)』, 2011
- 12) 齊藤諒・青木真理「思春期における第二反抗期に関する研究 : 第二反抗期のプロセスと親との葛藤に着目して」『福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要』4 巻, 19-26 頁, 2021
- 13) 宮下一博「人間関係の発達と対人的関係」 齋藤誠一編著『人間関係の発達心理学 4 青年期の間関係』培風館, 109-134 頁, 1996
- 14) 須崎暁世「青年期における親子関係の再構築—現代の親子を離反に至らせないために—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科 2018 年度博士論文(未公刊)』, 2019
- 15) 二森 優希・石津 賢一郎「第二反抗期経験の有無と過剰適応が青年期後期の心理的自立と対人態度に与える影響」『富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要』11 巻, 21-27 頁, 2016
- 16) 福田佳織「中学生の第二反抗期の現状 : 母親に対する反抗的態度に焦点化して」『東洋学園大学紀要』25 巻, 25-36 頁, 2017
- 17) 加藤隆勝『青年期の意識構造—その変化と多様性』誠信書房, 1987
- 18) 小沢一仁「親への反抗」 落合良行編著『中学二年生の心理』大日本図書, 97-133 頁, 1998
- 19) 須崎暁世「現代の青年における第二反抗期—反抗が第二の分離個体化に及ぼした影響を中心に—」『神戸大学発達科学部 2008 年度卒業論文(未公刊)』, 2009
- 20) 鈴木康平「青年と家庭」 久世敏夫他著『青年心理学入門』有斐閣, 125-161 頁, 1980
- 21) 須崎暁世「女子青年の語りから見えるもの—親子間の葛藤とその変容に焦点を当てて—」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科心理発達分野 神戸大学発達・臨床心理学研究』17 巻, 16-25 頁, 2018

- 22) 難波功士「怒らなくなった若者たち」『児童心理』994巻, 24-30頁, 2014
- 23) NHK 世論調査部「大人になりたくない中高生の親子関係～「中学生・高校生の生活と意識」調査から～ 放送研究と調査 11月号」日本放送出版協会, 2004
- 24) 白井利明「青年心理学の観点から見た「第二反抗期」」『心理科学』19巻1号9-24頁, 1997
- 25) 江上園子・田中優子「第二反抗期に関する認識と自我同一性との関連」『愛知大学教育学部紀要』160巻, 17-24頁, 2013
- 26) 青野篤子「ジェンダーの観点から見た第二反抗期」『心理科学』19巻, 1-8頁, 1997

【参考文献】

朝日新聞の記事検索(2022年6月)

日本発達心理学会第24回大会委員会 「自主シンポジウム思春期の親子関係—第2反抗期再考—」『日本発達心理学第24回大会論文集』, 2013